

様式2

2-5		主題	ここ、くつろげない?? 認知症状がある人への「環境プロジェクトその1」
認知症		副題	フロアの環境を変える 職員の意識が変わる
生活環境			
研究期間	9ヶ月	事業所	世田谷区立特別養護老人ホーム 上北沢ホーム

発表者：介護フロア副主任 石井文代・大里尚代	アドバイザー：
共同研究者： 4階フロア「環境グループ」メンバー	

電話	03-3306-5155	メール	kamikitazawa@setagayaj.or.jp
FAX	03-3306-1222	URL	

今回発表の事業所やサービスの紹介	世田谷区社会福祉事業団が運営する区立施設で、平成11年5月の設立です。ショートステイ利用者を含む120名の要介護高齢者が暮らしています。利用者の平均要介護度は4.2、認知症日常生活自立度Ⅲ以上者78%、平均年齢88歳です。4階建建物の2~4階で、今回発表する4階フロアの利用者は26名、認知症日常生活自立度Ⅲ以上の者88%です。フロアは回廊式構造で、4人居室が中心です。
------------------	---

<p>《研究前の状況と課題》</p> <p><b>【4階フロアの状況】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>利用者の安全確保及び行動制限しない生活空間とする目的から、居室内や壁、共用スペースに物を置いたり飾らないようにして、異食や私物紛失を防止していた。</li> <li>終日周回される利用者に対しては、安全への目配りはしても、周回の原因軽減策として環境を改善するという発想には至らなかった。</li> <li>利用者がフロア内で座って過ごせる場所は、食堂の椅子か居室のベッドのいずれかに限られていた。</li> <li>日中は、見守りのため、利用者はできる限り食堂に集まって過ごしていただくのが常態だった。</li> </ul> <p><b>【課題】</b></p> <p>フロアに暮らす利用者にとって生活空間に選択肢がなく、自由に居場所を選ぶことができない生活環境である。それが“問題行動”を誘発しているのではないか。</p>	<p>《研究の目標と期待する成果》</p> <p>目標は、認知症状のある利用者の周辺症状ばかり注目してケアを行うのではなく、そのものに向かい合い支援していかれるよう職員の課題意識が変わり、利用者主体のケアを徹底することである。</p> <p>目標に向けての第一段階として、まずフロアの環境課題を改善することで利用者の生活ニーズにこたえ、利用者の変化が職員の意識変革につながるよう、次に挙げる3点に取り組んだ。</p> <p>①休む間もなくひたすら歩き続ける利用者に、座りたいと思う時に座れる場所がある。</p> <p>②大勢でのコミュニケーションに加わりたくない利用者が輪の中に入らずにゆったり過ごせる空間がある。</p> <p>③植木を間仕切り代わりに、個室のようなそうでないような隠しのある安心した空間がある。</p> <p>上記①～③の空間づくりにより、不安な表情で息を切らして歩き続ける利用者が、安心した表情で過ごせるようになることを目的とした。</p>
---	---

## 《具体的な取り組みの内容》

### 【取り組みの概要】

フロアとしての環境改善の取り組みは、ホームとしての取組みでもあるため、実施に向けて次の段取りを踏みながら、フロア内だけでなく施設事業としての合意形成を行った。

特に、①考え方の根拠となる基本知識の理解②年度を跨いた長期スパンでの実施計画作成③しっかりした収支計画④調度品選定⑤環境変化によるリスク予測と事故等回避策の5点について、フロア内協議（フロアミーティング等）や職場内研修、物品調達の方法検討等を行った。特に⑤については、ホーム経営に関することとして施設長、係長等との協議を重ねた。

### 【取り組みの経過】

09.10～10.1 月1回のフロアミーティングで取組みの趣旨説明を繰り返す。出席職員からは環境変化によるリスクへの不安が強く出される。関連書籍を職員間に回覧、日常の話題とした。

10.2 実施決定。物品準備開始。担当グループ立ち上げ。

10.3 物品設置。（購入、職員持込み）

- ・食堂にソファ1台設置。
- ・デイルームにソファ1台設置。
- ・デイルームに掛け時計設置。
- ・デイルームに観葉植物3本設置。

10.5 廊下にソファ1台設置。

\*いずれの物品も設置位置は利用者の行動特性を分析し安全に配慮した上で決定。

## 《取り組みの結果と評価》

・廊下のソファ：歩き始めると休まず必ず1周以上歩き続ける利用者4名が、1周せずに自らソファに座ってくつろぐようになった。

・デイルームのソファと植木：4名が自ら植木近くの椅子に座り一人で過ごす時間ができた。

・食堂のソファ：居室から食堂を覗くが利用者の輪の中に入れなかった利用者が、自らソファに座り他の利用者を眺めて過ごせる。

「どうしたらしい」と常に不安気な利用者が、先に座っている利用者の隣に自らぴったり座って落ち着いた表情でいられるようになった。一人では不安になり昼寝ができなかった利用者が自らソファに横になる時間ができた。

リスクに関しては、

・廊下にソファを置くと歩行者が躊躇かないか。  
→目立つ赤色に。背もたれと肘掛けが歩行者の視界に入り、かつつかまれる高さのものを選定。

・植木の葉や土を食べてしまわないか  
→園芸ボランティアの協力により毒性のない観葉植物を選定。

## 《まとめ》

- ・環境を変えることで利用者の行動変容が認められ、落ち着いて過ごす時間ができた。
- ・「危険」即「撤去・中止」ではなく、見守る体制ができ、“問題行動”に対する職員意識が変化。
- ・「その2」として利用者主体の環境整備を継続。

## 《参考文献》

認知症ケア環境辞典 日本建築学会編

### 《提案と発信》

「発想を変えたらケアが変わる 利用者の生活がよりいきいきと変わる」ことを実感しています。たとえば認知症ケアについて、当施設のようなフロアが単位の大規模な集団生活、多床室、回廊式構造等に対しても、それを既成の制約であるととらえずに、できることからえてみてることで変化が生まれることを、私たちは学びました。植木1本、ソファー1台から、利用者の生活が変わり、私たち職員の意識も変わります。

### 【メモ欄】追加資料 有 無